

令和8年度 第2回（通算第61回） 山梨県立博物館 運営委員会 議事録

1. 日 時

令和8年9月3日（木） 午後2時～午後4時

2. 場 所

山梨県立博物館 生涯学習室

3. 出席者

【運営委員】

相沢季里委員、市川美季委員、大石学委員、大隅清陽委員、笹本正治委員、
中山誠二委員

【文化振興・文化財課】

宮里文化企画指導監、福地文化財主事

【博物館】

守屋館長、柳沢副館長、近藤学芸幹、小畑学芸課長、石神企画交流課長、海老沼リーダー、宮下リーダー、中野学芸員、松田学芸員、茶園学芸員、日比野学芸員

会議の次第

- （1）開会
- （2）挨拶等
- （3）審議
- （4）報告
- （5）その他
- （6）閉会

会議の概要

- （1）開会

○委嘱状交付

- （2）挨拶等

○館長挨拶

○委員長・副委員長互選

○委員長挨拶

- （3）審議【非公開】

1. 令和10年度の企画展について
2. 令和9年度の新規研究計画について

※非公開理由：山梨県情報公開条例第8条第1号及び2号に規定する事項について審議等を行うときに該当するため（私信第3条第1項）

（4）報告【公開】※一部非公開

1. 甲州財閥顕彰強化事業について【非公開】

※非公開理由：山梨県情報公開条例第8条第1号及び2号に規定する事項について審議等を行うときに該当するため（私信第3条第1項）

2. やまなし人物探訪の運営について

（委員）

- ・やまなし人物探訪コーナーの利用状況について、教えていただきたい。また、関連講座については、どのくらいの人が参加しているのか。

（事務局）

- ・やまなし人物探訪コーナーについては、細かな利用者のデータを取っているわけではないが、近代人物館の入館者をこえる利用者数があると記憶している。講座の参加者については、各回5、60名の方に参加していただいている。

（委員）

- ・大勢の方がやまなし人物探訪コーナーを利用しているようで安心した。

（委員）

- ・県庁から県立博物館に移設された背景があるため、実際に利用者がいるのかどうか、こちらとしては不安がある。

（委員）

- ・様子を見てみると、やまなし人物探訪コーナーが、他のものに紛れてしまっているように感じ、わかりにくいのではないかと思っていた。ただ、講座にも5、60人の人が訪れているということで安心している。

3. 歴民協年次集会の開催について
4. 開催済み展覧会について
5. 資料・情報委員会の答申状況について
6. 利用者状況について

7. みんなでつくる博物館協議会の開催状況について

(委員)

- ・「山梨の禅宗文化」展については、国宝「達磨図」がメインになっていたかと思う。ただ、この展覧会が話題になった時には、すでに展示替えがおこなわれてしまい、拝見することができなかった。
- ・展示期間がかなり限定されていると聞いていたので、話題になる頃、例えば展覧会の会期後半に展示をしたほうがよかったのではないだろうか。なお、前期も後期も展示内容は工夫されていて、とてもよかったと思う。

(委員)

- ・学校現場でチラシを配ってもらえなくなっているということについてだが、現在博物館で進めている共同研究の中で、博学連携をテーマにしたものがあつたかと思う。この中では、学校現場との調整なども研究されているという理解でよろしいか。

(事務局)

- ・博学連携自体が、ここ数年で形が変わってきているように感じる。共同研究では、学校の生徒たちが博物館に来ることによって博学連携になるのか、それとも学校のニーズに博物館が応えるだけよいのか、またどうすれば互いに学びのある現場にできるのか、どのようにすれば教員のニーズに応えられるのかなどについて研究している。
- ・博物館そのものをどのようにすれば体験資料にできるのかという点や、博物館自体をどのように学校に活かしてもらえるのか、という点について、学校に赴き、現場の教員と話をする中で、検討しているところである。
- ・なお、こちらの状況を児童・生徒に届けることが難しくなっている反面、一部では濃い連携が取れているという、大変アンバランスな状況ではある。チラシが配られなくなったことにより、逆に学校現場からチラシを求める声が届くこともある。教員個人の方針に左右されてしまう面があるため、それが子供たちに悪い影響を与えてしまうことがないようにしなければいけないと思っている。

(委員)

- ・来館者が多ければ多いほど、それが博物館にプラスをもたらすわけではない。来館者数だけでなく、博物館がどのくらい来館者の心に残るかが重要になってくる。
- ・長野県立歴史館には、長野県の北及び東方面の人々が多く訪れる傾向にある。南方面については遠方になるため、「おでかけ歴史館」という出張博物館事業を展開している。例えば、安曇野の学校とはこの事業をおこなう中でよく連携を取っているが、こうした事業を盛んにおこなえばおこなうほど、現場の学芸員の負担が増えていく。

- ・多くの事業をただ実施すればいいというわけではなく、ある程度量をセーブできる体制を現場で作るべきかと思う。すべての事業を展開していくことはできないということを前提にした上で、山梨県立博物館がどのような役割を担っていくべきか考えていくべきだろう。
- ・このままでは現場の負担が増えるばかりである。ある程度実施可能なこと、不可能なことについて、本委員会でも提案していくべきだと思う。

(委員)

- ・山梨県立博物館だけではない。南アルプス市ふるさと文化伝承館でも、年間で150回ほど出前授業をおこなっている。また帝京大学のやまなし伝統工芸館でも、校外学習の支援をおこなっているが、すべてに力を入れすぎると、館全体のバランスが取れなくなってしまう。

(委員)

- ・チラシを学校現場に配れないというのは、大変ショックである。ただ、現場も相当疲弊している。実際のところ、紙に印刷されたチラシなどが夏休み前に学校に多く届くのに対し、それをすべて子どもたちに配布するのも大変手間な上、子供たちもすべてのチラシに目を通すかという、そういうわけでもない。
- ・アンケートなど、あらゆる類のものが現場におりてきており、それに対応する教員たちも疲弊している。例えば、博物館に何を期待するのかというアンケートを学校現場に依頼するだけでも、教員にとっては負担になってしまう。
- ・ただ現場でニーズがあるという面もある。「総合的な探究の時間」などについても、現場の教員はどのように対応したらよいか、頭を抱えている。
- ・今までのやり方通り、チラシを作成し配付する、講師を派遣するというような手法もよい点はあるかと思うが、別の委員からもご指摘があったように、量よりも質といった、丁寧な対応をすることによって、現場の教員にもその活動が広まっていくといいのではないだろうか。
- ・今は紙媒体の時代ではない。SNSで検索した上で、AIに聞く時代になってしまった。その中で、博物館の名前が出てくるような形が理想的である。チラシを受け取ってもらえないというのは、今という時代を表している。現代の現状に合わせて、別の手法で学校現場へ博物館の声を届ける方法を考えていくべきではないだろうか。

(委員)

- ・山梨県立博物館では、大変活発な活動をされていると感じた。甲州財閥や人物探訪コーナーなどについては、さまざまな利害関係を考えると、運営上、難しいところがあるように思う。

- ・県立博物館に物理的に近い学校と、例えば遠方の山間部の学校などに、平等に声かけすることも大切だろう。近隣の学校は、そこまで声がけをせずとも、学校側が博物館を意識してくれると思うが、遠方の学校はそうではない。網からもらすことがないよう、遠方の学校にもアピールをすることで、効率的に運営ができるかと思う。

(5) その他【公開】

(委員)

- ・現在、南信州民俗芸能継承推進委員会のアドバイザーに任命されている。長野県もそうだが、山梨県においても伝統芸能を担う人々が少なくなっている現状があるかと思う。こうした伝統芸能は、文化財指定をする時以外注目されない傾向にあるが、県立博物館として、また山梨県としてこうした伝統芸能の現状を把握しているのか。今後現状を把握するために、博物館と県とでうまく連携をしていただきたいと思っている。
- ・また、長野県では防災に備えカードを作成している。山梨県立博物館においては、過去災害の展覧会をおこなっていると思うが、こうした展示の内容をどのように後世に伝えていくかを考えた際に、県とどのように提携していくかが大事かと思う。

(事務局)

- ・伝統芸能や災害の関係については、県の観光文化部の中で共有し、対応していきたい。

(事務局)

- ・配布物の案内
- ・次回委員会の案内（秋・初冬頃の開催を予定）

(6) 閉会